

平成 28 年度

事業所名 : グループホーム・榎内

# 1 自己評価及び外部評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3090200202		
法人名	有限会社 川崎タクシー		
事業所名	グループホーム・榎内		
所在地	岩手県宮古市田老字西向山119-16		
自己評価作成日	平成 29年 2月 24日	評価結果市町村受理日	平成29年5月8日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou_detail_2016_022_kani=true&amp;JigyosyoCd=0390200202-00&amp;PrefCd=03&amp;VersionCd=022">http://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou_detail_2016_022_kani=true&amp;JigyosyoCd=0390200202-00&amp;PrefCd=03&amp;VersionCd=022</a>
----------	---

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通二丁目4番16号
訪問調査日	平成 29 年 3 月 8 日

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

明るく楽しく居心地のよい場を提供できるように力を入れています

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

管理者と計画作成担当者を中心に、常にケアの向上を目指し、新しい試みや工夫に挑戦し、利用者の暮らしが豊かなものになるよう腐心する姿勢は大いに評価される。本年度からは、職員2人で利用者3人を担当するシステムを導入し、職員と利用者がより理解し合える関係が出来上がり、事業所全体に温かい空気が流れ、家庭的雰囲気満ちている。近隣の仮設住宅の住民が減り、周辺地域の変化がみられるものの、地域活動への参加や町中の小中学校との交流など、地域との繋がりを広げる活動に日々努めながら、利用者の生活がより活気あるものになるよう取り組みを続ける事業所である。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

【評価機関:特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会】

事業所名 : グループホーム・椋内

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	●介護指針 ・利用者を尊敬します ・家庭的でくつろげる場所を目指します ・介護技術の向上に努めます ・明るい職場環境を作ります	法人の理念・姿勢に基づき、生き甲斐を持って生活してもらおう、趣味や食べ物の好みなどを大切に、一人ひとりに合わせたケアを実践している。担当制の導入により一人ひとりに対する親密なケアが出来、理念に近付く支援が出来るようになってきた。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自身が地域の一員として日常的に交流している	●田老大漁祭りに出かけ、多くの地域の方々との交流し、歌謡ショーなど一緒に楽しめた ●田老第一中学校より、文化祭の招待を受け伺ったり、ハンドベルや吹奏楽の訪問の受けてたりして交流を図った ●地域の花壇整備には、地域の方々より声掛けを頂き花植えに参加させて頂いた	町内のお祭り(大漁祭り)の見物、町内会による国道の花壇づくりの手伝い他、同系列のグループホームとの交流など、事業所内だけの人間関係にならないよう外部との繋がりを大切にしている。向かいの仮設住宅と盛んに交流してきたが、現在は殆どの方が移転した状況にあるなか、中学校のボランティアや社会学習の生徒との交流が図られており、小学校や子ども会との交流の拡充など、さらなる地域交流の手立てを模索している。	開設当初より周辺地域の変化がみられるなか、自治会との交流を核としながら、交流対象の範囲を町の中心部まで拡げるなど、交流のシーズを探ることが望まれる。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	●田老第一中学校や宮古木曜会(合唱サークル)のボランティアコンサートがホームで開催された時には、近隣の仮設の住宅の方々にもお声掛けをし、利用者と一緒に楽しんで頂いた ●台風10号の際には、仮設住宅の方が困った際にはいつでも来て頂けるように、外灯をつけておいた		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	●2ヶ月に1時間程度で運営推進会議を行い、地域の方々を招き、施設への質問や意見を話し、話し合い、向上できるよう、議事録をまとめている。 ●他の近隣のグループホームの運営推進会議にも参加させて頂き、地域交流とともに情報交換を行っている	自治会長にメンバーに入ってもらい、事業所のお知らせなどを地区に回覧出来るようになった。民生委員、駐在、消防分署に加え、高校、小中学校の先生方と多様なメンバーで多岐にわたる話題について意見交換を行っている。地域交流の充実に向けた助言もいただいている。職員全員で町内の他のグループホームを視察し、運営推進会議にオブザーバー的に参加させてもらい、デスクッションを行った。事業所の運営、管理者の考え方など学ぶところが大きかった。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	●運営推進会議の案内は、郵送ではなく手渡しで配り、ホームの様子や地域の様子などを話し合いコミュニケーション図っている	市の担当課には極力出向いて、運営の状況や地域の課題等について話し合うようにしている。終末期に関するマニュアルをつくる際に、市に相談、協議し、適切な助言を得るなど、連携、協力は円滑に行われている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	●身体拘束をしないケアの為に、担当制を生かした利用者の対応方法を定期的に話し合い、玄関の施錠の禁止や、4点柵の禁止など身体拘束以外の知識を含めて、職員全員が理解している ●ホームの外に出たい利用者もいるので、それを抑制するのではなく、見守れる体制を職員間の声掛け連携にて対応している	系列のグループホームと「身体拘束廃止委員会」をつくり、スピーチロックをはじめ、身体拘束に繋がらないケアのため、言葉掛けの表現方法、姿勢、声のトーンまで含め、どうコミュニケーションを取るかなどケアの基本を大事にしなが話し合っている。職員本人がストレスを感じ、利用者への対応に不安を感じた時は、休憩をとったり、他の人に代わってもらうなど、互いにフォローし合える職場環境を整えながら対応している。	

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内の虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	●身体拘束廃止委員会を中心に内部研修や会議を開き身体拘束の防止に努めている ●権利擁護など外部研修にも積極的に参加し、知識を深めている ●職員のコミュニケーションが充実している			
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	●権利擁護の研修に積極的に参加し、研修で学んだことを現場に周知させ、施設のスキルアップを図っている			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	●契約の際には、契約書の内容を一通し読んで説明し、納得頂いてから契約の署名を頂いている ●説明後に、家族にとっての不安・疑問を世間話を交えて伺い、信頼関係を構築しながら契約を進めている			
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	●家族へ利用者の近況を伝えるべく、毎月利用者個々に合わせた手紙を作成し送付している ●手紙には、いつでも意見要望等がある場合にはお声掛け頂けるように、あるいは、面会かたがたお話しに来て頂けるように言葉を添えるよう努めている	一人ひとりの日常生活の様子を担当者が工夫を凝らしてまとめた手紙を毎月家族に送付している。時折、請求書に「ご要望をどうぞ」と書き添えているが、運営自体に対する意見、要望はあまりない。利用者からは、食べ物や外出の要望が出ることもあり、可能な限り対応するよう努めている。		
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	●日々の業務の中で、提案を聞き、申し送りや職員会議で決定し反映している	毎月リーダー会議および職員会議を開催している。勤務体制、必要な備品、消耗品の確認など主として事業所運営に関する話し合いが多い。職員からは率直に意見が出され、皆で話し合いながら同じ方向を目指すようになっているが、意見の一致を見ない場合は、管理者と計画作成担当者で調整のうえ決定している。		
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	●事前に希望休を確認したり、職員の負担を考慮しながら、シフト表を作成している			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	●毎月の職員会議の後、内部研修を行っている			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	●運営推進会議には、近隣のグループホームにも案内を出して出席して頂き、先方の運営推進会議にもこちらから参加させて頂いている			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	●入所時には明るく自己紹介をしたり、名字ではなく氏名でお呼びすることの了解を頂いたり、ご本人のこれまでの生活歴などを伺ったりして受容・共感・尊厳に心がけるようにしている		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	●サービスの導入時は、居宅介護支援事業所との連携が多く、専門職同士の情報提供になるが、もう一歩踏み込み、担当ケアマネの方の意見や考えも何うように心がけている ●居宅事業所の担当より引き継いだ後は、可能な限り、ご家庭に伺い、家族が緊張しない状況にて、入居される方の生活歴等を伺ながら、家族の雰囲気を感じさせていただいている ●話を進める中で、入居前にホームをご家族に見て頂いたり等、契約までに1ヶ月以上の時間をかける		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	●家族にとって、介護疲労、ホームへ入所させることへの不安、親を見放してしまうのではないという罪悪感と自尊心の葛藤、など、そのケースにより全く異なる為、これまでの経験で物事を図らず、常に初心の意識を持って真摯に接するように努めている ●本人とは可能な限り数回会い、「顔見知り」になるようにしている。3回目ぐらいにはご本人にとって安心できる知り合いの〇〇さんにシンクロされているので、それ以降は、安心して会って頂き、入居時にホームへ来られた時には「顔見知り」がいる安心感を持って頂いている		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	●「利用者あつての職員」ということを大前提に理解し、ともに過ごす者同士として、家事を行って頂いている		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	●毎月の家族への手紙は、先月の通院報告、イベントの報告と写真をたくさん添えて送付している ●物品で必要なものがある場合には、手紙よりも直接電話にて相談して交流を図るようにしている		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	●利用者の育った環境(地域、学校、思い出の地)や友人等との思い出の場所へドライブしていると、近所だった方々や友達と偶然会ったりして、話に華が咲くこともある	利用者の実家周辺など馴染みのある場所をドライブで廻る支援を行っている。また昔からの趣味や習慣を生かす支援を行っており、漁師だった人は海釣りに出かけるなどの取り組みも試みている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	●利用者同士のトラブルがあった場合には、席替えや間に入り場を和ますようにしている ●利用者の輪の中に入り、世間話をするように心がけており、利用者からも、冗談をぶつけてもらえるようなことが多く、笑ってもら回数が増えてきている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	●家族等より声掛けを頂いた際には、要望にできるだけ答えるように、時間を儲けている		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	●担当は、世間話も兼ねて、利用者と話しながら最近の様子を聞くように努めている ●本人の望む暮らしを知り、家族・担当職員・ケアマネジャーとサービス担当者会議や朝夕の申し送りや報告・再検討の提案をしている	職員は利用者の話す言葉の真意を様々な角度から理解しようと努めている。そのためにも心に余裕を持つことを心がけながら利用者と接するなかで本人の思いを引き出している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	●日々の会話の中で、好きな食べ物や趣味などを聞いたり、家族が来所された際にはコミュニケーションを兼ねて同じく好きな食べ物や趣味などを聞いたり、情報の収集に努めている		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	●日々の見守りから情報収集、一日の流れを把握し、一人ひとりの現状を理解し、対応方法に試行錯誤している		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	●1ヶ月に1度担当によるモニタリングを行い、3ヶ月に一度担当者会議を行い目標の見直しを行っている。タイミングが合えば、利用者や家族にも参加頂いている。また、朝夕の申し送りは、担当以外の職員からも対応方法やちょっとした意見などの交換も行われている。例えば、糖尿病の傾向のある方に病院より野菜を先に食するように指示があった場合、配膳されれば好きなものから食べたいので、先に野菜ジュースを飲んで頂くとか、コーヒーは甘くして飲みたいときには、ゼロカロリーの甘味料を使用して楽しんで頂く、等している	担当者2名の毎月のモニタリング資料をもとに、3ヶ月毎の短期介護計画の評価、見直しを計画作成担当者、担当者へ利用者、家族を加えて行っている。心の安定、生活機能の改善、お楽しみの3本柱で組み立てるようにしており、同じ目標でもケアの方法を個別に考えるなど、種々工夫を加えながらサービス内容やサービス計画を見直している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	●ケース記録を毎日記入し、日々の利用者の様子を観察し、申し送りにて情報共有している。 ●疑問に感じたこと、変わったことを担当職員に伝えるようにし、担当業務の円滑化を図っている		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	●訪問看護との連携を図る ●家族が散髪のできる方もいるので、訪問方々、散髪されることがある		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	●ドライブをしたり、外食をしたり、買い物へ出かけたりする ●買い物際には、利用者に、物がどこにあるかやレジでの世間話など、店員と交流するタイミングも仲介しながら設けるように努めている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	●利用者のほとんどが月1回程度の通院となっており、1名は家族対応、それ以外はホームで対応となっている ●通院の報告は、緊急時はケアマネジャーが電話にて家族に連絡しているが、特に問題が無い場合は、手紙に記載している	入居前からのかかりつけ医に通院している利用者が多く、診療科も内科、皮膚科など多岐にわたっている。出来るだけ家族に同行してもらおうが、最近では職員の同行が多くなっている。訪問看護師が的確に助言をしてくれ、夫々のかかりつけ医との連携にも協力してくれる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	●週2回・1回1時間の訪問看護師により、利用者の健康管理が行われており、医療行為となる部分の対応は、看護師によって、また、それ以外は、看護師に相談しながら処方薬の対応を行っている		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	●入院時、家族の不安は退院後の帰所の事であるため、医師や地域連携室と相談をし、ホームへの帰所が難しい場合は地域連携室より療養病院の手配を依頼し、戻れる場合には、居室を保持している		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	●一般的にグループホームにおける「看取り」は、形式が確立されておらず、各事業所独自の形式を行政が監理・指導している形式である。指針に関しては、行政に相談して作成済みであるが、職員にとっての進捗に合わせたマニュアルがないため、在宅・施設各事業所における「看取り」の利点を参考にし、訪問看護と話し合いを持ちながら現在作成中である	現状では在宅診療医師を確保していないため、完全な看取りの体制は出来ていないが、可能な限りホームで介護する方針を持っており、宿直員の配置は防犯に加え看取りの補完体制にもなっている。最近も看取りに近い形で介護し、入院4日で亡くなったケースがある。今後を見据え、具体的な対応マニュアルの整備や系列グループホームと共にターミナルケア研修に力を入れている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	●訪問看護に24時間相談ができ、指示をもらい、迅速な対応ができるようになっている		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	●土砂水災害マニュアルを2月に作成したため、まだ、マニュアル沿った訓練は行っていない ●1月に火災避難訓練を行い、災害時の内部研修を行っている	春と秋に定期の避難訓練を行っている。夜間宿直員が配置され、防犯、防災の備えが強化された。夜間は周辺が真っ暗になることから、防犯灯やカメラの設置を検討している。また地滑りや土砂災害に対するマニュアルを作成したことから、災害を想定した訓練を行うこととしている。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	●一人ひとりにあった対応があるので、職員同士の情報交換をして色々試したりしている	利用者一人ひとりに対して、相手の気持ちを汲んで一律な対応にならないよう、またどんな行動でも否定せず、肯定的に受け止め、よい方向に繋がるよう対応するなど、利用者の尊厳を一番に考えるケアを心がけている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	●食べたいものを聞きくと、甘いものが多いので、スイーツデーと称し、個人計画に取り入れ、また他の利用者としてはレクリエーションとして一緒につくって食べている		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	●利用者第一を大前提にその人に合ったペースで過ごして頂いている ●特に希望のない利用者にも、選択肢を設け自己主張の機会を作っている		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	●2ヶ月に1回、ホームに床屋に来てもらい散髪を行っている ●本人の望む服装ができるよう、筆筒と一緒に衣類を選ぶようにしている		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	●肉や魚を選ぶことができる ●一緒に料理をしたり、盛り付け、後片付けなど協力してやっている	利用者の希望も取り入れながら肉、魚を中心とした献立を1週間分作成し、食材をまとめ買っている。利用者は職員の調理を手伝う人がいる他、下準備から後始末まで出来ることを手伝っている。畑を園庭につくり、季節の野菜も食卓を飾っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	●利用者の水分摂取量を把握し、足りない方には、ゼリーを作成して食べて頂いたり、水分の器をコップ以外に工夫してみたり、経口補水液を凍らせて含ませたり、と工夫している ●排便時未消化の食品が多い方、または、食事量が少なくなってきた方には、刻み食、とろみ付けやおかゆを用意したり、介護用のお惣菜をおかずの2品中1品使用してみたり、主治医より栄養補助食品を処方頂き、ムースやゼリーにして召し上がって頂いたりしている		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	●自立している利用者への声掛け、見守りを行い介助が必要な利用者には、職員対応でおこなうが、できる限り本人が行えるよう支援している		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	●排泄パターンを把握し、声掛けし、一緒にトイレに行っている ●本人に合ったリハビリパンツや尿取りパットを使用している	殆どの利用者が声掛けでトイレで用を足しているが、介助を必要とする人が多い。夜も定時の声掛け、誘導でトイレに立っている。安易におむつを使用せず、少しでも自分の力で排泄出来るよう支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	●主に水分補給を中心に取り組んでいるが、それでも難しい場合は医師に相談し、所要役を出して頂いて、体調に合った方法で排泄を促している ●訪問看護にも報告し、腹部マッサージが可能な方には行って頂いている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々に合った支援をしている	<ul style="list-style-type: none"> <li>●他の利用者を一緒に入りたいとの希望の時は、疾病等に支障が無い限り、一緒に入浴することもまれにある</li> <li>●入浴時間は午前中に設定しているが、午後の希望の際には、通院介助により職員が手薄になる時以外は希望を叶えるように努めている</li> <li>●腹筋に力が入らず前傾姿勢になってしまう、あるいは浴槽を踏ぐことが出来ない場合には、機械浴を行っている</li> <li>●浴槽のお湯は一人毎に取り替えるため、個人の希望や皮膚状態に合わせた入浴剤を使用している。また、5月には菖蒲、12月にはゆずを対応するよう心掛けている</li> <li>●認知症状から入浴拒否が起こるが、職員の会話の工夫や入浴担当職員以外の職員も協力して入浴に促すように努めている</li> </ul>	週2回午前入浴を基本としているが、利用者の希望によっては、時間帯を変更して対応している。入浴を好まない人には気分の良い時に誘うようにしている。職員と会話しながらゆっくりと入浴を楽しんでいる。気の合う利用者同士と一緒に入ることもある。入浴剤や季節の菖蒲湯、ゆず湯を楽しんでもらっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	<ul style="list-style-type: none"> <li>●眠気が強い利用者には、声掛けをして居室に案内して休んで頂く</li> <li>●臥床時間が長い利用者には、体位変換やクッションを利用し、また、起きれそうな時にはホールに案内して離床の機会を設け、周りの利用者との会話に参加できるようにしている</li> </ul>		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	●医師からの処方薬は職員全員が周知するようにしていると同時に、ホームと薬局が連携をして「かかりつけ薬局」の形式をとり、薬局にも利用者の薬の管理してもらい、一包化にして服薬に事故が無いようにしている		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	●食後の片づけの食器拭き、お盆拭き、洗濯たみ、など、できる人が自然と率先して行うために、担当が出来る雰囲気がある。また、消極的で行かない方、少し手抜きをしようとする方など、個性に合わせて作業の分担を促すようにしている		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	<ul style="list-style-type: none"> <li>●天気がよく暖かい日には、散歩をする</li> <li>●月に一度程度、外食やドライブにてホームから離れて職員が付きっきりで希望に沿って外出する</li> <li>●屋外に野生の動物が現れた時には、声を掛けあって眺めるようにし、逃げた時には、また、その感想を言い合って話題作りをするようにする</li> </ul>	日常の散歩は園庭が中心になっている。毎月1回、利用者個別に買い物や外食など本人の希望するコースで職員と外に出掛けるようにしている。お花見や紅葉狩りなど四季のドライブは楽しみな行事になっている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	<ul style="list-style-type: none"> <li>●お小遣いを預かり、買い物をしている</li> <li>●個人計画の中に、商品を選択し、レジで会計を行う事を盛り込んでいる方もいる。この際は職員は必ず隣に付き添って不安を解消する役割を担っている</li> </ul>		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	<ul style="list-style-type: none"> <li>●現在、家族より電話が本人宛に掛ることがないため、所用の最後に、本人と話されないか聞いてみると、ほとんどの家族が遠慮、あるいは拒否されてしまう</li> <li>●一昨年、年賀状に取り組もうとしてみたが、帰宅願望をあおる結果となってしまう、帰れないことに返って本人に悲しい思いをさせてしまった</li> </ul>		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	<ul style="list-style-type: none"> <li>●窓より日が入り明るいのだが、季節によって利用者の顔の位置に日が当たりまぶしいときがあるので、気を配るようにしてその時間だけカーテンを一部閉めるようにしている</li> <li>●室温は26℃低くはないが、利用者にとって寒いと感じる時は、衣類を足すのではなく、各扉を開めるようにすると、気温が変わらずともあたたくくなったと納得して下さる</li> <li>●季節の飾り物を行ったりして、季節感をとらえられるように工夫する</li> </ul>	吹き抜けの高い天井を太い梁が囲み、大きな窓からは海が望め、陽光が差し込む。2階の通路が回廊式でホールを取り巻く設計になっており、2階に上った人に手を振ったり、声掛けが出来る。季節毎に飾り付けを工夫し、3月は雛人形が飾ってある。ホールの床は明るいベージュ色で、落ち着いた中にも開放感があり、気持ちよく過ごせる共用ホールである。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	<ul style="list-style-type: none"> <li>●利用者の意志を最大限に尊重し、独りになりたいと希望された時には、居室で過ごして頂いたり、2人で話したいときは、どちらかの居室は話されたり、ホールで誰かが歌いだしたりすると、一緒になって歌うも、それが、居室からであったり、ホールの窓で外を眺めながらだったりする</li> </ul>		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	<ul style="list-style-type: none"> <li>●家族の写真飾ったり、馴染みの飾り物を置いたりして頂いている</li> <li>●自室を自ら掃除して頂き、生活観を維持して頂いている</li> <li>●客観的にみると、寝具が乱れていたり、筆筒が整理整頓できていない、尿臭がする、などは、だらしがないや、みっともないと、とらわれがちだが、実は、散らかっている方が本人にとって安心する、という場合もあるので、話をしながらほどほど一緒に片づける。尿臭の場合には、汚染した下着・寝具があるので、本人がいない時に交換する</li> </ul>	利用者本人にとって居心地の良い部屋づくりを心がけており、多少乱雑でも本人が落ち着ければよしとしているが、自分自身の生活を維持する気持ちを持ってもらうため、職員が手伝いながら掃除、整頓をするようにしている。気に入った日用品や飾りものを並べ、自分の部屋として愛着を持って暮らしている様子が見られる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	<ul style="list-style-type: none"> <li>●居室の入り口の扉には、表札と写真を貼って自分の居場所として安心してもらえるようにしている</li> <li>●馴染みの品物を居室においていただくのだが、夜間等に踏かないように、配置を考えている</li> </ul>		